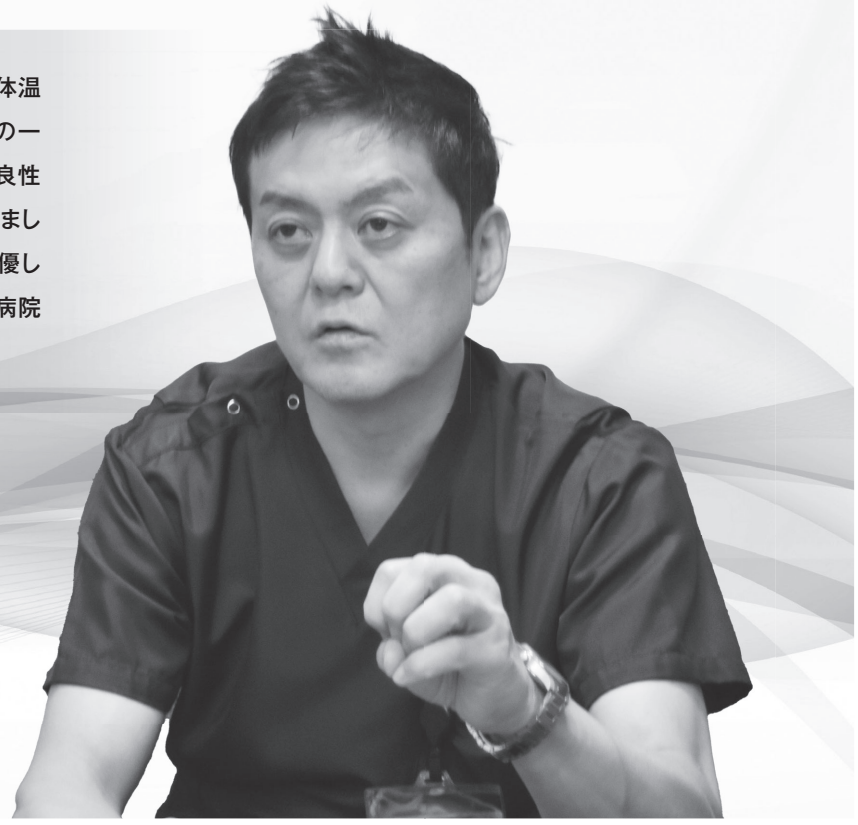
企画・制作：読売新聞社広告局 広告

間脳下垂体腫瘍（かんのうかすいたいしゅよう）

より正確な手術へ 目覚ましい技術の進歩

私たちの頭の中心部にある間脳（かんのう）は、自律神経の働きを調節し、体温や食欲、睡眠などを正常に保つ役割を果たしています。その間脳の一部で「ホルモンの司令塔」と呼ばれる下垂体（かすいたい）は腫瘍ができやすく、良性でも様々な症状が現れます。以前は大がかりな切開手術を行っていましたが、近年は手術技術と医療器具の進歩に伴って正確かつ身体に優しい手術ができるようになりました。医療法人光川会福岡脳神経外科病院（福岡市南区）の矢野茂敏・副院長兼脳神経外科部長に伺いました。



医療法人光川会
福岡脳神経外科病院
矢野 茂敏氏

下垂体は「ホルモンの司令塔」

――間脳下垂体腫瘍とは？

間脳は大脳に包まれた場所にあり、視床、視床下部、松果体（しょうかたい）、下垂体という部位があります。私たちの意識や感覚、自律神経の働きを調整し、体温や食欲、睡眠などを正常に保つ役割を果たしています。

そのうち下垂体は視床下部にぶら下がっている約1センチの器官です。成長ホルモンをはじめ甲状腺や副腎皮質にホルモンの分泌を促すホルモンなど計8種類を出し、「ホルモンの司令塔」の役割を果たしています。間脳下垂体腫瘍は、脳腫瘍全体でも髄膜腫（ずいまくしゅ）、神経こう腫とともに多い腫瘍です。

腫瘍ができる原因ははっきりと分かっていませんが、下垂体はホルモンを作る器官なので細胞の新陳代謝が激しく、腫瘍ができやすいと言われています。

下垂体にはホルモンを分泌する細胞と分泌しない細胞があり、分泌しない細胞に腫瘍ができると目がかすむ、暗く感じる、視野が狭くなるなどの症状が出ます。

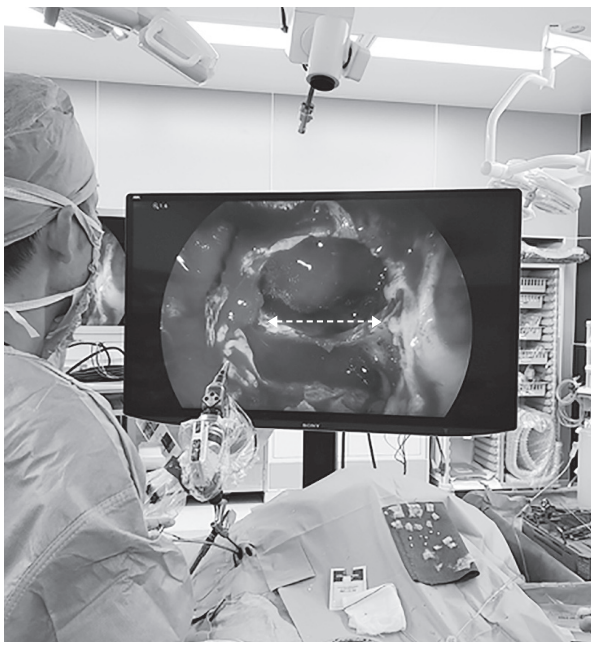
ホルモンを分泌する細胞に腫瘍ができると、ホルモンが多く出ることになります。例えば、成長ホルモンが多く出ると、先端巨大症と言って手足が大きくなったり、放置するとがんになったり、心肥大・高血圧・糖尿病になったりします。プロラクチンというホルモンが増えると女性の月経が止まり、副腎皮質（ふくじんひしつ）刺激ホルモンが多いと身体が丸くなり、精神不安定や糖尿病、骨粗しょう症につながります。

若い人から高齢者まで幅広い年齢に起こりますが、プロラクチン産生腺腫以外は男女の発生数の差はありません。

――診断はどのように行いますか？

多彩な症状が出るため、患者さんは当初、何科に診てもらえば良いか分からず、眼科や婦人科、内科などを受診されますが、そこで原因が分からず、下垂体腫瘍を疑って脳神経外科に来られるケースが多いのです。

下垂体腫瘍が疑われたら、下垂体をターゲットにMRI（磁気共鳴画像装置）で撮影し、診断するケースが一般的です。下垂体は小さくて見えにくいので、造影剤を使って間隔を狭く撮影すると腫瘍があれば白く見えて、確実な診断につながります。大きさは3～4ミリから40ミリの巨大な腫瘍までもあります。



55インチモニターに映し出される4K内視鏡画像
右の鼻腔からの操作（白矢印）画面の両矢印間の距離はおよそ1.5cmである

内視鏡と4K画像による手術が進化

――治療にはどのような種類がありますか？

以前は唇の裏側を切って、持ち上げて顕微鏡でのぞいて取る手法でした。しかし、20年ぐらい前から、内視鏡手術が導入され始めました。

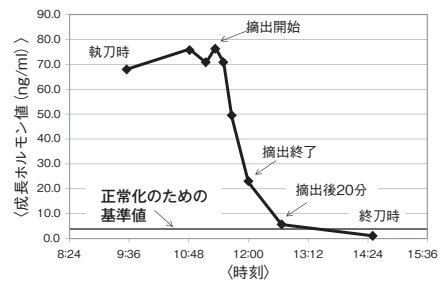
経鼻的（けいびてき）アプローチと言って、鼻の穴の奥に1センチ弱の穴を空け、直径2～4ミリのカメラやハサミ、ピンセットなどを2本ずつ計4本入れ、正常の細胞を残して悪くなった細胞をはぎ取るような手術を行います。2人で操作します。また、大きな腫瘍だと経鼻的アプローチに加えて頭に1センチほどの穴を空ける経頭蓋（けいずがい）的アプローチを同時に行って2方向から取ることもあります。

目覚ましいのはカメラと画質の進化です。カメラが中に入ると、中の様子は画素数の大きな4K内視鏡を通じて大きなモニター映像で拡大して見ることができるので、大きさと色、腫瘍と正常部分の境界が鮮明に分かります。解析度がどんどん良くなっていますし、正常部分を多く残せると、正常な機能をかなり保てて、ダメージを受けた機能も回復します。また、自在鉗子（かんし）など先が曲がる手術器具も格段に使いやすくなっています。

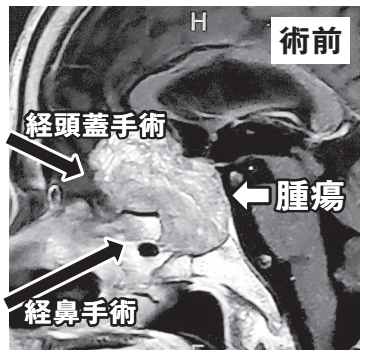
現在では、例えば成長ホルモンが過剰に出ていると、成長ホルモンの値を手術中に測定して、低下の様子を見ながら取り残しのないように手術が行われます。しばらく待機して、値が下がらなければ腫瘍がまだ残っていると考えられますので探すこともあります。

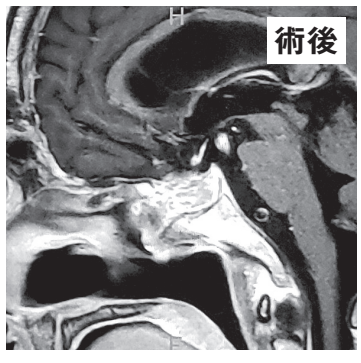
脳神経外科医がこだわっているのは、①合併症なく安全に腫瘍を取る②下垂体の正常機能をできるだけ温存することです。手術に当たっては、患者さんに納得していただけるよう丁寧な説明を心がけています。

またプロラクチンが出過ぎると飲み薬で改善できますし、手術で十分に腫瘍が取り除けなかった場合は薬物注射でコントロールするケースも増えています。



摘出中の成長ホルモン値測定結果、摘出開始とともに急速に成長ホルモンの低下がみられ、基準値以下になったことを確認して終了する





内科医も加わり安心な治療を

――これからの治療は？

間脳下垂体腫瘍などは予定を入れて急がずしっかり手術をする疾病です。一方で、当院は脳卒中などの救急患者が多いです。そこでこの度機能分離をすることになりました。今年7月、当院の近隣に79床の新病院「南福岡脳神経外科病院」を開業します。

特徴としては、脳神経外科に加えて内科があることです。高血圧や糖尿病、肺炎など脳と関連が深い病気は多く、内科を含んだ治療を確実に行うためです。間脳下垂体の場合だと、内分泌検査が必要なため、院内の内科の先生にしっかり診察してもらえます。

79床のうち、40床が一般病棟。39床は回復リハビリに充て、高次機能障害など言葉を発する訓練、嚥下、食べる訓練やリハビリを行います。患者さんにとっては、脳外科医に加えて内科医にも診断してもらうと、総合病院のように安心感をもって治療を受けていただけると思っています。

医療法人 光竹会 住宅型有料老人ホーム「グランドG-1」 〒811-1254 福岡県那珂川市道善 1-121 TEL:092-951-1165 FAX:092-951-1212